

[看護研究]

当院看護師の看護研究への困難感に対する意識調査

尾道市立市民病院 看護部 3病棟

高橋 沙希, 下竹 智美, 津田 美保, 澤井 衣里子

要 旨 看護研究は新しい知識の習得や実践の充実のみならず専門職の成長に不可欠であるが、臨床現場では負担感が強く、意欲の低下が課題となっている。当院においても看護研究は業務と並行して取り組むことは研究者の負担となることがあり、研究に対して困難を感じる声があった。そこで当院看護師の看護研究に対する困難感を明らかにすることとした。看護師 132 名を対象に調査した結果、「研究は難しい」「精神的に負担である」「時間的余裕がない」は研究経験の有無、年齢別、経験年数別の全てにおいて高く、困難と感じていることが分かった。看護研究を意欲的に行っていくためには「研究時間」「手当」「研究する仲間やアドバイザー」が必要と意見があった。今後研究者が看護研究を意欲的に行うためには研究時間の確保や手当、共同研究者や病棟スタッフの協働など環境を整えることが必要であると考えた。

Key Words ; 看護研究, 困難感

はじめに

1952 年日本看護研究学会が発足して以来、看護研究は基礎教育から看護実践の現場に至るまで、看護学の基盤として重要視されている。看護研究は看護に役立つ新しい知識習得となり、看護実践を豊かにすると共に個人の視野の拡大や成長に繋がる。また、看護研究を実際に取り組むことで看護研究の必要性や意義の再認識、やりがいや成果を感じることができると考える。加納らは「看護研究の取り組みは、看護師が臨床看護実践における疑問や問題、課題をそのまま放置せず、科学的に探求する姿勢の育成につながる」と述べている¹⁾。日本看護協会の看護者の倫理綱領においても「専門的知識・技術の創造と開発に努め、看護学の発展に寄与する」²⁾と明

示されている。

しかし、現実の臨床現場では自発的に研究を希望する看護師は少なく、輪番等の受動的な体制で実施されている。宇多らは「多くの施設では、看護師は受動的に看護研究に取り組んでおり、自主的に取り組む人 / 取り組みたいと考えている人は 4 ~ 30% であった」と述べている³⁾。当院においても例外ではなく、業務と並行して看護研究に取り組むことは研究者の負担となり、研究に対しての困難を感じる声がある。前野らは困難感の要因として「研究自体の難しさ」「研究時間」「研究する仲間やアドバイザー(指導者)、病棟スタッフの連携」を挙げている⁴⁾。看護研究の経験の有無に関わらず「時間的余裕のなさ」は共通の課題であり、研究活動を否定的に感じ

An Investigation of Nurses' Perceived Difficulties in Conducting Nursing Research of Our Institution

Department of Nursing, Onomichi Municipal Hospital

Saki TAKAHASHI, Tomomi SHIMOTAKE, Miho TSUDA, Eriko SAWAI

てしまう要因となっている。また、研究はチーム活動であるため病棟スタッフの協力やチームワークが精神的負担の軽減に直結する。

これまで当院の看護研究に関する意識調査は行われていない。そこで当院看護師の看護研究に対する困難感を明らかにすることを目的として本研究に取り組むことにした。

研究方法

1. 研究目的

当院看護師の看護研究に対する困難感を明らかにすること

2. 用語の定義

困難感：看護研究活動をすすめるにあたり難しいと感じ、悩むこと

経験者群：過去に院内看護研究を行い、研究代表者、共同研究者を経験した者

3. 研究デザイン

量的研究

4. 研究対象

当院に勤務する看護師 232 名（師長，育休・産休中を除く）

5. 調査期間

2024 年 10 月 28 日～2024 年 11 月 29 日

6. データの収集方法

当院看護師へ先行研究を参考に独自の質問を作成したアンケート調査

各部署に配布し、記入後は各部署へ設置した回答用紙封筒へ密封後回収袋を投函し、収集期間終了後研究担当者が回収する

7. 調査内容と分析

調査内容は基本属性（年齢，経験年数），研究経験の有無，看護研究に対する意識とした。意識調査は、先行研究を参考に「研究の必要性」「研究活動への思い」「人的資源」「物的資源」「研究の基本的知識」の5つのカテゴリーで構成し、4段階のリッカート尺度で点数化した。自由記述では、具体的な困難や不安，希望するサポート，今後の意欲について回答を得た。得られたデータは単純集計および平均値比較を行った。

8. 倫理的配慮

研究対象者に対して調査の目的と方法，自由意志による参加，プライバシーの保護を文書で説明，チェックボックスによる同意確認を行った。無記名のアンケート調査のため回収後の撤回が不可能であること，不利益が生じない旨を明示してデータ管理を徹底した。

結果

配布数 232 部のうち回収 187 部（80.6%），有効回答数 132 部，有効回答率 70.5%であった。

1. 対象の属性

年齢構成は 40 代（36.4%）と 50 代以上（33.3%）で約 7 割を占めた。（図 1）看護師経験年数は 11～20 年が（39.4%）と最も多く，次いで 21～30 年（30.3%）であった。（図 2）研究経験は経験者群 118 名（89.4%），未経験者群 14 名（10.6%）であった。（図 3）

2. 看護研究に対する意識

看護研究に対する意識調査での質問項目を 5 つのカテゴリー【研究の必要性】【研究活動への思い】【人的資源】【物的資源】【研究の基本的知識】にまとめ，各カテゴリーの平均値を「研究経験の有無」，「年齢別」，「経験年数」で比較した。（表 1）

1) 研究の必要性

「専門職として当然の責任である」では，経験者群 2.30，未経験者群 1.93 であった。経験年数別では 31 年以上の群 2.65 が最も高かった。

2) 研究活動への思い

「研究は難しい」「精神的に負担である」は研究経験の有無，年齢別，経験年数別のどの群においても 3.38 以上であった。一方で「研究活動に満足している」「やりがいがある」の項目は，経験者群，未経験者群ともに 2 点以下であった。

3) 人的資源

「適切な指導者がいない」は経験者群 3.09，未経験者群 2.64，「研究メンバーと協働しにくい」

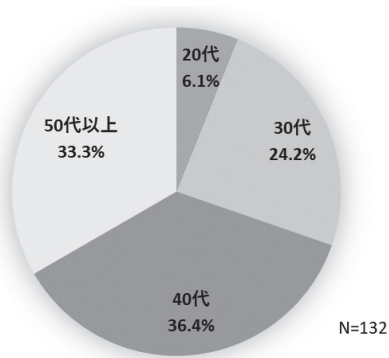


図1 対象者の年齢

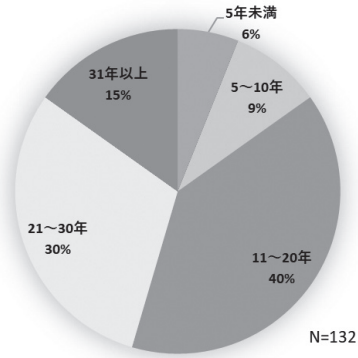


図2 看護師経験年数

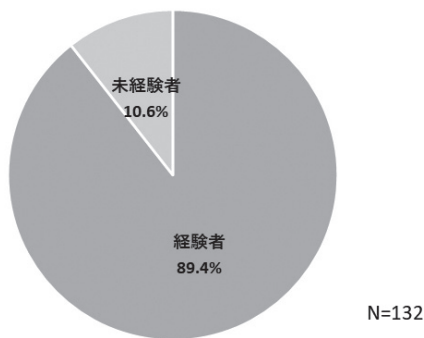


図3 看護研究経験の有無

表1 看護研究に対する意識調査での質問項目

	経験者群	未経験者群	20代	30代	40代	50代以上	5年未満	5~10年	11~20年	21~30年	31年以上
【研究の必要性】											
平均値											
1) 専門職として当然の責任である	2.30	1.93	2.38	1.91	2.27	2.45	2.38	1.83	2.10	2.35	2.65
2) 看護業務の改善に役立つ	2.53	2.57	2.88	2.28	2.65	2.52	2.88	2.25	2.37	2.72	2.70
3) 研究活動は自己啓発のため必要である	2.44	2.36	2.75	2.19	2.38	2.59	2.75	2.25	2.15	2.59	2.80
【研究活動への思い】											
4) 研究活動に満足している	1.82	1.64	2.13	1.69	1.75	1.89	2.00	1.75	1.63	1.92	2.00
5) やりがいがある	2.00	1.93	2.25	1.97	1.88	2.09	2.25	1.75	1.90	2.03	2.25
6) 研究は難しい	3.77	3.86	3.50	3.78	3.81	3.77	3.75	3.75	3.81	3.72	3.80
7) 精神的に負担である	3.79	3.79	3.38	3.78	3.75	3.89	3.63	3.58	3.81	3.85	3.75
13) 興味がある人が看護研究をするべきである	3.17	3.21	2.88	3.41	3.04	3.23	3.00	3.08	3.31	3.08	3.15
【人的資源】											
9) 適切な指導者がいない	3.09	2.64	2.13	2.91	3.08	3.25	2.50	2.83	2.94	3.23	3.20
10) 研究メンバーと協働しにくい	2.80	2.43	2.25	2.84	2.75	2.80	2.63	2.58	2.77	2.85	2.70
11) 病棟スタッフ（研究メンバー以外）の協力が得られにくい	2.63	2.14	2.13	2.66	2.63	2.57	2.25	2.42	2.67	2.69	2.35
12) 研究を通して仲間意識がもてる	2.63	2.86	2.75	2.50	2.65	2.75	2.63	2.67	2.56	2.67	2.85
【物的資源】											
8) 時間的余裕がない	3.71	3.86	3.50	3.69	3.81	3.70	3.75	3.75	3.75	3.77	3.55
14) 予算がなく経済的負担がある	2.32	2.43	2.13	2.50	2.23	2.39	2.00	2.58	2.35	2.31	2.40
18) 欲しい文献が入手できない	3.01	3.14	2.38	3.06	3.04	3.07	2.50	3.08	3.00	3.05	3.15
【研究の基本的知識】											
15) 研究したいことが思いつかない	3.35	3.43	2.88	3.53	3.23	3.45	3.00	3.42	3.33	3.44	3.35
16) 研究疑問を文章化することができない	3.21	3.36	3.00	3.38	3.08	3.27	3.00	3.25	3.25	3.15	3.30
17) 文献検索の方法がわからない	2.68	3.14	2.50	2.81	2.63	2.80	2.50	3.00	2.65	2.64	3.00
19) 調査・分析方法がわからない	3.10	3.50	2.88	3.16	3.04	3.27	3.13	3.17	3.12	3.00	3.45
20) 発表の仕方がわからない	2.73	3.36	2.88	2.94	2.79	2.66	3.00	2.92	2.87	2.56	2.90

は経験者群 2.80, 未経験者群 2.43, 「病棟スタッフ (研究メンバー以外) の協力が得られにくい」は経験者群 2.63, 未経験者群 2.14 であった。

4) 物的資源

「時間的余裕がない」は研究経験の有無, 年齢別, 経験年数別のどの群においても 3.50 以上あった。

5) 研究の基本的知識

「調査・分析方法がわからない」は経験者群 3.10, 未経験者群 3.50, 「発表の仕方がわからない」は経験者群 2.73, 未経験者群 3.36 であった。

3. 意識調査の質問項目で特に困ったこと, 不安に思ったこと

自由記述から大きく 3 つの 카테고리 【研究活動実施における環境】 【研究メンバーやアドバイザー】 【知識的困難】 が抽出された。(表 2)

1) 研究活動実施における環境

「時間外となる」「時間的余裕がない」「精神的負担」が主な回答であった。

2) 研究メンバーやアドバイザー

「指導者の意見が変わり困惑する」「メンバーと時間があわない」など回答があった。

3) 知識的困難

「研究したい症例がない・テーマがない」「分析・統計がわからない」があった。

4. 意識調査の質問項目以外で特に困ったこと, 不安に思ったこと (表 3)

表 2 意識調査の質問項目で特に困ったこと, 不安に思ったこと

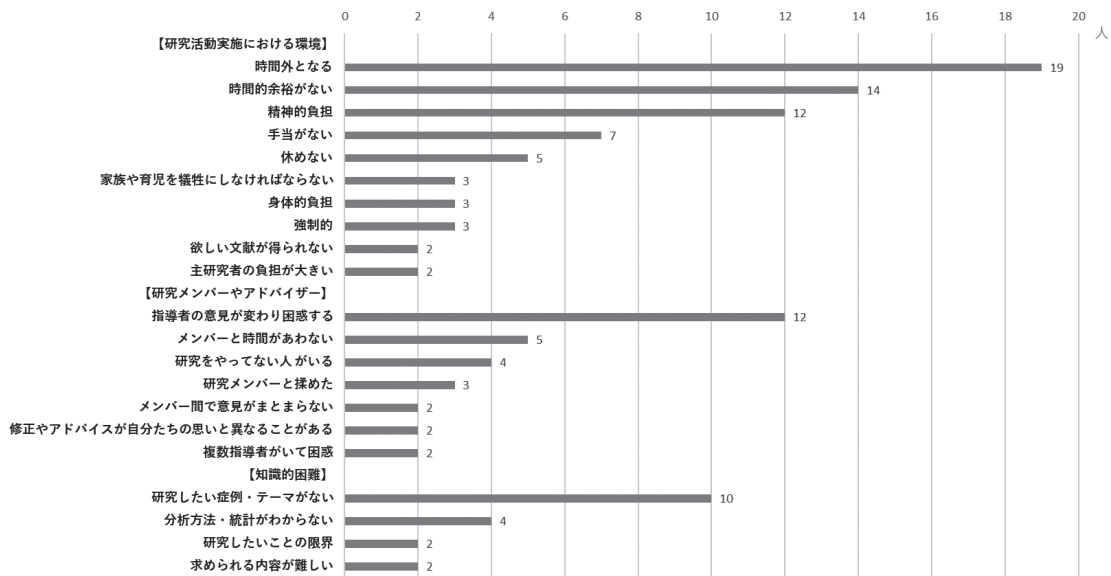
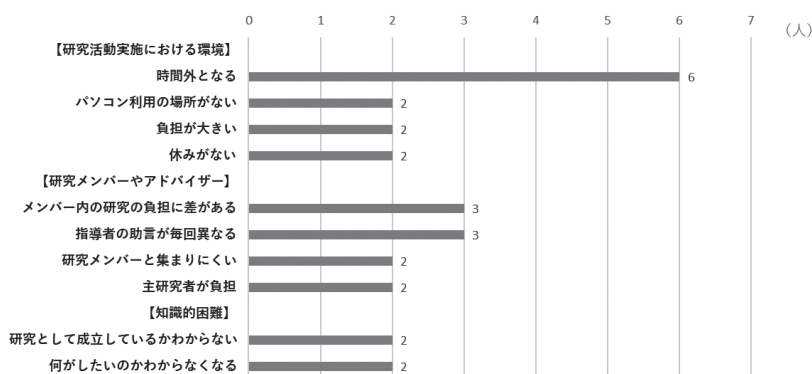


表 3 意識調査の質問項目以外で特に困ったこと, 不安に思ったこと



5. 求めるサポート

「研究時間」に次いで「時間外手当の支給」「研究メンバーやアドバイザー」が求められていた。(表4)

6. 今後の研究意欲

「今後看護研究をやりたい」では「やってみても良い」は10名(7.6%)であり、「できればやりたくない」43名(32.6%),「やりたくない」79名(59.8%)であった。理由として「時間的余裕がない」「ストレス」「負担」「業務時間外になる」であった。(表5)

「専門職としての当然の責任である」は未経験者と比較して経験者群の平均値が高く、「看護業務の改善に役立つ」「研究活動は自己啓発のため必要である」は経験者群・未経験者群と大差はない結果となった。年齢別では30代、経験年数では5~10年が低い結果となった。宇田は「6~10年目の看護師は既婚者が多く、育児や家事に追われ研究に取り組む時間的余裕がなく意欲が低いことが考えられた」と述べており⁵⁾、自由記述でも「家族や育児を犠牲にしなければならない」と回答が得られた。先行研究と同様に、仕事と子育てなど家庭との時間の両立が難しいことが低い結果に繋がったと考える。

考 察

1. 看護研究に対する意識調査

1) 研究の必要性

2) 研究活動への思い

「満足している」「やりがいがある」は全体で

表4 どのようなサポートをして欲しいですか

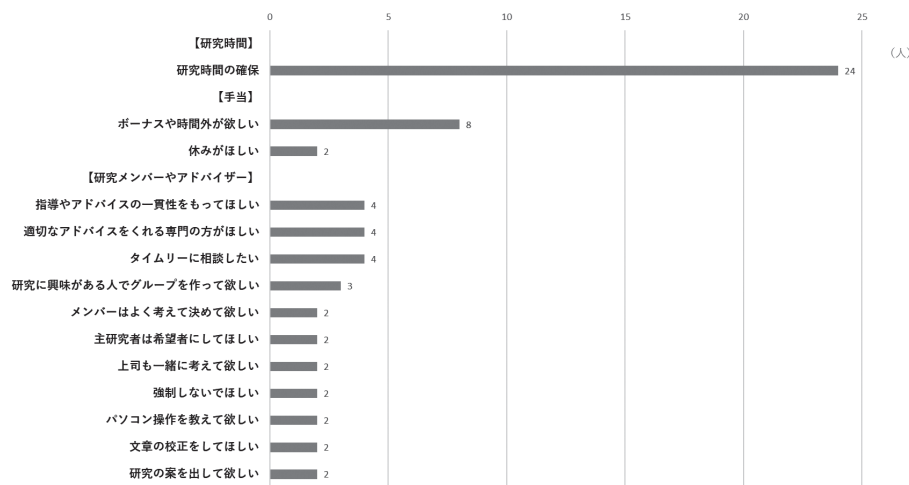
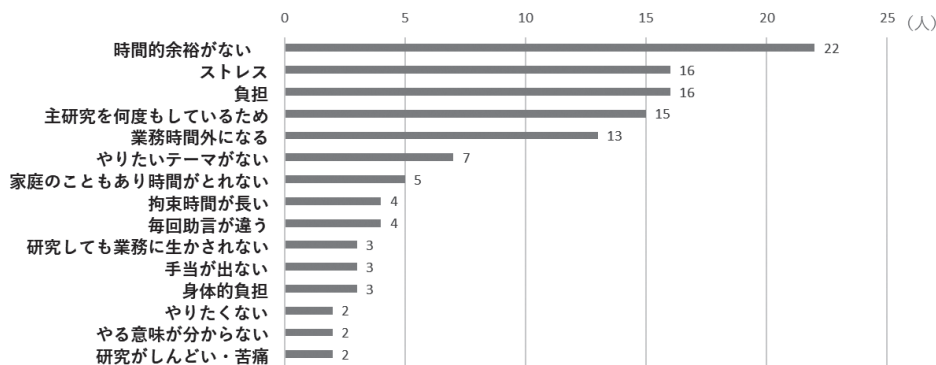


表5 研究をやりたいくない理由



も平均値 1.8 ~ 1.99 と低く、「満足」や「やりがい」は感じていない結果となった。「研究は難しい」「精神的に負担である」は属性を問わず全群で上位に点数が高く、研究の困難と精神的な負担を感じていることが分かる。看護研究は輪番制などで担うことが多く、通常業務に加えて仕事量が増えるため研究者の負担になる。こうした状況が、看護研究への意欲低下に繋がると考える。

3) 人的・物的資源

「適切な指導者がいない」「研究メンバーと協働しにくい」「病棟スタッフ(研究メンバー以外)の協力が得られにくい」は経験者群が高くなっており、経験年数を経るほど困難感を強く感じる傾向にある。未経験の多い 20 代に比べ実際に研究を携わった経験から連携の難しさを感じると考える。

「時間的余裕がない」は研究経験の有無、年齢別、経験年数別の全てで 3.5 点以上と高く、看護研究を困難と感じていることが分かる。前野らは「今後も積極的に研究を挑むためには、病棟スタッフの温かいサポートはかせない」⁶⁾と指摘する。研究の継続には病棟スタッフの理解と研究メンバーの協働が不可欠であり、組織全体で研究を協働作業として認識することが求められている。物的資源に関しては「時間外となる」「時間的余裕がない」が上位の回答であった。交替制勤務下では研究メンバーとの勤務調整が困難であり、勤務時間外や休日に研究活動をしていると答える人が多くみられた。研究活動を行う時間の調整を行うことで研究への取り組みの意欲向上へ繋がるのではないかと考える。

4) 研究の基本的知識

未経験者群は基本的知識全般について困難と感じているが、経験者群は研究を重ねることで一定の知識を習得していると考えられる。自由記載では、経験者群でも研究自体への困難やテーマが見つからないことに困難を感じている。加納らは「テーマを適切に選定するには、日常の

看護実践から疑問を抽出し研究へと変換する支援が必要」⁷⁾と述べていることより、研究者の疑問を引き出すための適切なアドバイスが求められている。

2. 今後求めるサポート

看護研究を意欲的に行っていくためには「研究時間」「手当」「研究する仲間やアドバイザー」が必要と回答があった。先行研究においても研究時間の確保は常に重要視されているが、実際には勤務時間内での研究活動は難しい現状がある。勤務時間外としても仕事の一環として手当があれば研究に対しての意欲や思いは変化していくのではないかと考える。また研究メンバーも共同研究者として責任をもって参加し、指導者はその都度相談できる環境を整え、タイムリーな関わり方をしていくことが求められる。

結 論

看護研究に対する意識調査では「研究は難しい」「精神的に負担である」「時間的余裕がない」が困難な要因であった。

おわりに

本研究では当院看護師が看護研究に対して困難と感じている要因を明らかにし、求めるサポートについて回答を得ることができた。今後研究者が看護研究を意欲的に行うためには研究時間の確保や手当、共同研究者や病棟スタッフの協働など環境を整えることを必要としていることが分かった。

引用文献, 参考文献

- 1) 加納典子, 福田由紀子, 桂川純子, 他:A 病院における看護職の研究に関する実態調査-困難と感じる要因と支援方法-. 日本赤十字看護学会誌 vol.8, p74-80, 2008.
- 2) 公益社団法人日本看護協会, 看護者の倫理綱領, 2021, https://www.nurse.or.jp/nursing/rinri/rinri_yoko/index.html (参照 2024.9.12)
- 3) 宇多絵里香: 臨床看護研究に関する文献検討,

2012, <http://www.kango-kenkyu.org/achievements/pdf/2009.pdf> (参照
2024.9.12)

- 4) 前野真由美, 永田由紀子, 島田美佐, 他: 臨床の場における看護研究の難しさと求められる支援, 静岡県立大学短期大学部研究紀要第 22 号, 2008 年.
- 5) 前掲 3), 8.
- 6) 前掲 4), 15.
- 7) 前掲 1), 79.

